

6－9					
主題	五感刺激を活用した生活史アセスメントの実践				
副題	園芸活動が生活史を語り始めた				
キーワード 1	生活史	キーワード 2	個別ケア	研究(実践)期間	4 ヶ月

法人名	社福)一誠会	事業所名	特別養護老人ホーム 偕楽園ホーム
発表者(職種)	又吉彩香(介護職員)、揚妻優衣(介護職員)		
共同研究(実践)者	服部忠勝(介護主任)、小川新一郎(介護主任)、工藤天平(介護職員)		

電 話	042-691-2830	FAX	042-691-8288
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	社福)一誠会が運営する偕楽園ホームは、昭和55年開設の定員100名の従来型特別養護老人ホームである。平成26年に国際品質規格ISO9001認証を取得し、継続的なサービス品質向上に取り組んでいる。当法人は東京都初、全国5例目の社会福祉連携推進法人の本部法人として、地域共生社会の実現に向けた広域連携にも取り組んでいる。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、利用者の生活意欲向上や交流促進を目的として園芸活動を実施している。活動中、過去の農作業や食生活、家族との思い出が自然に語られ、生活史情報として把握されていた。一方、認知症の進行や重度化により生活歴の把握が困難な場合があり、個別ケアに必要な情報収集が課題となっていた。また、園芸活動のどの要素が生活史の想起を促すかは明らかになっておらず、その検証が必要であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本研究は、園芸活動における回想の誘発要因を明らかにし、生活史情報の個別ケアへの活用可能性を検討することを目的とした。仮説として、五感刺激により想起される記憶の特徴は異なり、特に嗅覚刺激は家族や生活史に関する自伝的記憶を強く喚起し、個別ケアに有効であると考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

令和7年6月から9月までの4か月間とした。対象は園芸活動に参加した利用者22名(男性10名、女性12名、平均年齢84.2歳)で、要介護3が5名、要介護4が11名、要介護5が6名、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ以上は14名であった。対象植物は、高齢者に馴染みが深く、視覚・触覚・味覚・嗅覚が異なるきゅうり、かぼちゃ、ミニトマト、ゴーヤ、とうもろこし、赤シソ、かぶを選定した。

活動は植え付け、水やり、観察、収穫、試食を行い、「見る」「触れる」「香りを感じる」「味わう」機会を設け、自由に思い出を語れるよう対話しながら実施した。活動中の全発言を記録し、過去の経験や思い出を回想発言として抽出した。内容は「農業経験」「食生活・料理経験」「家族との思い出」「子ども時代」「地域生活」の5項目に分類し、五感刺激との関連を分析した。回想発言は、発言時の活動内容や利用者の行動・言動をもとに、最も関連性が高いと判断される五感刺激に分類した。さらに、生活史情報の個別ケアへの活用を記録し、事後の家族アンケートで生活や会話の変化を調査した。

《4. 取り組みの結果》

活動期間中、22名の利用者に対して園芸活動を実施した。その結果、活動中には合計260件の発言が記録され、そのうち回想発言は182件で全体の70%を占め、園芸活動が生活史を自然に引き出す契機となることが確認された。当初は野菜ごとに回想内容を整理したが、分析の結果、回想には野菜の種類よりも五感刺激の寄与が大きい可能性が示唆された。回想発言を五感刺激別に分類すると、視覚刺激38件、触覚刺激34件、味覚刺激32件、嗅覚刺激78件であり、嗅覚刺激は全回想発言の約43%を占め、他の刺激の約2倍で最多であった。特に赤シソを用いた活動では、参加者22名中18名から回想発言が得られ、24件(67%)が家族との思い出や家庭生活に関する内容であった。また、利用者同士が思い出を語り合う場面が3回確認され、交流の活性化につながることを認められた。

回想発言は要介護度にかかわらずみられ、要介護5の利用者6名から32件、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ以上の利用者14名全員からも回想発言が得られた。生活史情報は個別ケアや役割づくり、日常会話に活用され、普段は発言が少ない認知症利用者が赤シソの香りを契機に昔話を始め、その後の会話が増加した事例も確認された。事後の家族アンケートでは、「園芸活動が生活の楽しみになっている」「昔話をする機会が増えた」など肯定的な意見が寄せられた。

《5. 考察、まとめ》

本研究では、回想を引き出す要因は植物の種類より、園芸活動を通じて得られる五感刺激の寄与が大きい可能性が示唆された。特に嗅覚刺激を契機とした回想発言は78件と最も多く、全回想発言182件の約43%を占めたことから、嗅覚刺激は生活史記憶を喚起する重要な刺激である可能性が示された。また、視覚・触覚・味覚・嗅覚では想起される記憶の内容が異なり、感覚刺激ごとに回想の特徴が認められた。

さらに、赤シソを用いた活動では参加者22名中18名から36件の回想発言が得られ、そのうち家族との思い出や家庭生活に関する発言は24件(67%)を占めたことから、嗅覚刺激は回想だけでなく利用者同士の交流も促す効果が期待された。加えて、要介護5の利用者6名から32件、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ以上の利用者14名全員から回想発言が確認され、認知症や重度要介護状態でも生活史記憶への働きかけが可能であることが示された。また、得られた生活史情報は役割づくりや日常会話などに活用され、利用者理解を深める有効なアセスメント情報となった。以上により、園芸活動は五感刺激を活用して生活史を引き出し、利用者理解や個別ケア、認知症ケアにつなげる実践的手法として有効である可能性が示された。生活史情報を活用したアセスメントは、利用者理解を深め、より質の高い個別ケアの実践につながるものと考えられる。今後は、その効果がQOLへ及ぼす影響についてさらに検証したい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究の実施及び発表にあたっては、施設長の承認のもと、対象者および家族に研究目的と内容を説明し同意を得た上で、個人情報に配慮し匿名化して実施した。

《7. 参考文献》

Herz RS. A naturalistic analysis of autobiographical memories triggered by olfactory, visual and auditory stimuli. *Chemical Senses*. 2004;29(3):217-224. doi:10.1093/chemse/bjh025.
Matsunaga M, Isowa T, Yamakawa K, et al. Psychological and physiological responses to odor-evoked autobiographic memory. *Neuro Endocrinology Letters*. 2011;32(6):774-780. PMID: 22286798.

《8. 提案と発信》

本研究では、園芸活動は単なるレクリエーションではなく、利用者の生活史・価値観を把握するアセスメント手法となる可能性が示された。特に嗅覚刺激は回想を促し、要介護5や認知症高齢者でも生活史情報を引き出せることを確認した。特別な設備を必要とせず、高齢者福祉施設で実践可能である。今後は生活史情報を活用した個別ケア効果を検証し、本手法を生活史アセスメント実践モデルとして発信したい。